第142号 たけの子だより 2021年11月1日

わらべうた遊びから学ぶ人との関わり

青空保育たけの子

青空保育たけの子では、毎日の朝の会でわらべうたを取り入れています。童謡とは違うわらべうたは、その名の通り、子どもたちの遊びから生まれ、伝承されてきたうたです。しかし現代では、その子ども同士の伝承が途切れたため、大人から伝えていくことが多くなりました。

大人から伝える時、どんなことに注意しなければならないのか・・・。今回は十時やよい著『「わらべうた」から始める音楽教育』から考えてみたいと思います。

◇わらべうたが子どもの財産となるために

著者の十時さんは、この本の中で、わらべうたが子どもの財産となるために4つの大切なことをお話ししています。

①大人である私たちは、何を心にとめて、子どもの遊びを伝えていけば良いのでしょうか。

②音楽的な美しさ

③仕草を美しく、心地良さを伝えるには、しっかり安定した拍で、丁寧に触る=これが「基本」

④テーマ遊びとファンタジー遊びはなぜ必要なのでしょうか。

それぞれ、大切なのですが、今回は特に③の内容を少しご紹介します。

◇言葉はとても大切です

子どもは、触られることで身体の形を認識します。

①全身（自己認知の第一歩）

しっかりと身体の形を認知できるように、手の平全体で身体にそって、ゆっくりと触ります。

背・腹・胸などは掌と指とが自然に身体にそうように軽く開いて柔らかく動かします。

手や足などは、その丸さが感じられるように手で包みこむように当ててずらしていきます。

②手・足 遊び（自己認知の第2歩）

＊まず、子どもをよびつけたりしないで、大人が寄っていきましょう。（できるだけ正面に座る）

＊子どもの膝の上にそっと手をおいて、子どもが手を委ねてくれたら始めましょう。ひっこめたら「またね」と去りましょう。

＊「やっていい？」と聞く必要はありません。初めての時は何が始まるのかわからないのですから返事のしようがありません。

＊快諾でも拒否でもないことが多いでしょう。そこで聞かれれば、戸惑う子もいますし、ちょっと機嫌が悪ければ「いや」といいます。

「いや」という子に無理にするのは、まず第一に子どもの意志を尊重しないことになります。同時に大人は「聞いても聞かなくても良いことを聞く」と思わせます。同時に大人は一応聞くけど「返事に関わりなく、思うとおりにするのだ」と思わせます。

＊このような時にはっきりと「いや」という子は、自分の気持ちの強い子です。そのような子であれば、「いや」といったためにしてもらえなかったことに引っかかりを残し、「いや」ということが習慣化する事もあります。

＊逆に「いや」というのに、「そんな事いわないで」などといったら、ご機嫌取りに受け取られ、甘えから「いや」という事を繰り返し、大人を試すようになる子もでます。

子どもは、言葉や行動によって、意思表示することを、学んでいます。同時にその意思表示によって、相手が行動することも、子どもは見て学びます。ですから、大人は言葉の通りに行動するか、しない時はしない理由をきちんと告げてそのように行動すべきです。そうでないと、言葉をいい加減に使うようになりますし、その前に、言葉の意味を間違って受け止めるでしょう。

③顔遊び（自己認知の第3歩）

まず、互いの肌が触れ合って、受け入れる関係が出来た時に、初めてする遊びです。顔を触る時には、必ず他のどこかに触れて子ども自身が受け入れる体制ができてから、触れるようにしましょう。

続きはまた次回・・・。

辻見妙子